

2018年12月11日、『希望』『待望』など複数の作品を携えて、初の個展を開き、デジタル画家としてデビューを飾ったのは長谷川まさしさん(34)。

白いキャンバスではなく、iPadとアップルペンシルを使用し自身の世界観を描いています。

幼い頃から絵を描くことが好きだったという長谷川さん。その原点は漫画家を目指していた父親の姿にあります。絵を描いたり、山下清画伯のように切り絵をしている父親の姿がいつもあり、「自分も気づいたら絵ばかり描いていて、教科書は落書きだらけでした」と楽しそうに幼い頃のエピソードを話します。

「上手だね」と親や友達に褒めてもらうのがうれしくて、絵を描いては評価を求めるということを繰り返していました。友達から「何でお前しょっちゅう聞いてくるのか?」と言われたとき、初めて「自分が評価を求めている」ことに気付きます。「それからは評価を求めることを止めた」という長谷川さん。同時に絵を描くことから離れ、中学校では剣道部に、高校では弓道部へ入部し武道にのめり込みます。

しかし、高校のある時、友達が披露したギターに感動し、自分とは全く無縁だと思っていた音楽(＝芸術)に奇跡を感じます。「コード変換もうまくできずお世辞にも上手とは言えないギター

するということを追求しました。

無我夢中で表現することを目指した20代でしたが、30代に入り、「本当の自分自身を表現したい」と長谷川さんは思うようになります。イラストレーター、音楽、デザイン、舞台の大道具作りなどいろいろなことをやりすぎて「このままでいいのだろうか。自分が本当にやりたいことは何だろうか」と自分が何者であるのか分からなくなり迷走します。

そんな時今の妻と出会い、こんな言葉投げかけられます。「本当に楽しいと思う事は何?」。長谷川さんはその言葉にハッとさせられます。

「勉強のためという理由を先に置いて、一番大事な、楽しい」という気持ちを置き去りにしていたように思います。「迷いを相談する中で、信頼をしている人の寄り添いや一つ一つの言葉が、『絵画で自分を表現したい!』ということに徐々に気付かせてくれました。

再び絵を描き始めた長谷川さんの中で表現したいテーマがあると言います。それは『希望』。長谷川さんは言います「世の中不条理なことばかりで、良いときもあれば悪いときもあります。大事なのは悪いときをどう乗り越えていくか、その原動力になるのが『希望』であり、希望があるから人は前向きになれるのだと思う。その一つ一つが世代を

ROAD

輝く人たち No.25

作品に込めるのは
人の心に光を照らす「希望」

演奏でしたが、今思えば、あの感動が表現することの楽しさを知り、芸術の世界へ入っていくきっかけだったように思います」と長谷川さんは振り返ります。

高校卒業してから30代に入るまでは、「勉強のために」と、タレントスクールで演技やダンスを学び、音楽事務所の作曲家の付き人をしたり、オペラやミュージカルの舞台の裏方をするなど、とにかくいろいろな経験を通して表現

越えてつながっていく先に明るい未来があるのだと思います。

そんな思いを込めて、描き上げた作品『希望』は、第70回沖縄グラフィックデザイン部門で奨励賞を受賞します。「受賞は泣くほどうれしかったです。これがダメなら表現することをあきらめる覚悟もしていました」とその時の心情を明かす長谷川さん。受賞が大きな自信となり、今この道を歩んでいくことに一寸の迷いもありません。

「デジタル画家として歩みだしたばかりですが、これからも人の心に光を照らし、明るい希望となる作品を作り、それをより多くの人に見てもらいたいです。将来的には自分のギャラリーを持って、子どもたちに絵を描くことのすばらしさを伝えていくこともしていきたいです」そう語る長谷川さんの目は確実に前を向き、その目は夢と希望に満ち溢れています。

PROFILE

長谷川 まさし (34)

福岡生まれ。沖縄育ち。
Elkroi designs代表、浦添市文化協会美術部会員。
好きな言葉：井の中の蛙大海を知らず、されどその高さを知る。
画家としての活動以外に感性の幅を広げるため音楽を続け、ヴァイオリンとギターユニット「Comfort」のギターを務める。

- ①②初個展の様子
- ③作品「予感」
- ④第一子を授かった喜びを表現した作品「待望」
- ⑤第70回沖縄グラフィックデザイン部門で奨励賞を受賞した作品「希望」

